

群 教 セ	E03 - 03
	平 17.227 集

# みんなのために活動する意識を高める 学級作り

認め合いを生かした係活動「ぴかっと3組」の取組を通して

特別研修員 木暮 たまみ (伊勢崎市立あずま北小学校)

## 《研究の概要》

本研究は、小学校3年生の児童を対象に、よりよい学級作りを目的とし、認め合いを生かした係活動「ぴかっと3組」の取組において、みんなのために役に立とうとする気持ちの育成を目指したものである。今までの係活動の問題点に気づき、学級をよくするための係活動を考えて実践する。お互いの頑張りを認め合ったり協力してやり終えた成就感をもったりすることで、みんなのために活動する意欲を高めようとする活動である。

**キーワード** 【学級経営 小学校 学級活動 係活動 認め合い 振り返り】

## I 主題設定の理由

本学級（小学校3年生男子14名 女子14名）の児童は、子供らしく素直な児童が多い。学習に対しても教師の指示をよく聞き、前向きに取り組める。学年の初めは低学年の続きでまだ幼児性や甘えを残していたが、2学期になり遊びや趣味などの関心や興味の幅が広がり、仲間を意識した行動が見られるようになってきている。

学級は、児童が一日の大半を過ごす集団であり、空間である。よって学級は、すべての児童にとって、安らぎ感があり有意義な時を過ごせる場であるようにしたい。児童は、学級に対して「楽しいクラスがよい」「みんなで仲良くできるクラス」「勉強を頑張るクラス」など、様々な願いをもっている。自分の学級に愛着を感じ、もっとよい学級にしたいと素直な心で感じている。しかし、その願いは漠然としたもので、目的や手だてをもってよい学級にしようとする意識は十分に育っているとは言えない。学級のために自分が「何かできるか」「何かしよう」といった強い意識を感じることは少ない。

係活動について多くの児童は、学級の一構成員として果たすべき役割があればしたいと思っている。実際、すべき仕事があったり頼まれたりしたときは一生懸命に取り組んでいる。しかし、すべての児童がそうであるというわけではなく、仕事に興味やわからない児童もいる。多くの児童が、係活動は、決められた仕事をするだけでよいと考えており、自分から進んで仕事を見付けようとする

児童は少ない。

そこで、担任や児童が願う学級を作るために、児童が活躍できる場として、係活動を取り上げることにした。児童が主体的かつ創造的に係活動ができるように、教師が場や手だてを整えることで、児童はやりがいのある仕事を考案し友達と協力して実践するであろう。その取組や努力する姿を認め合う活動を行えば、自分が学級をよくするために一役を担ったことを実感でき、さらに学級のためになる活動を広げようとする意識をより高くもつてであろうと考え、本主題を設定した。

## II 研究のねらい

よりよい学級作りを目的とした係活動「ぴかっと3組」の取組において、係活動の問題点に気づく活動、係を作り実践する活動、お互いの頑張りを認め合う活動を行うことにより、学級や友達を意識し、みんなのために役に立とうとする気持ちを育てることができるところを実践を通して明らかにする。

## III 研究の見通し

1 1学期の係活動を振り返る過程において、「振り返りカード」の結果の資料提示と教師の働きかけを通して、係活動の問題点に気づき、学級をよくするために係活動をどのように改善したらいいか考えることで、新しい係活動への意欲をもつことができるであろう。

2 学級をよくするための係活動を考え、友達と協力して実践する過程において、「ぴかっと係さがし」を行うことで、友達や先生から活動が認められたことに喜びを感じ、活動への意欲を増し継続して取り組むことができるであろう。

3 実践をまとめる過程において、「ぴかっと係のプロ認定」を受けて、やり終えたときの成就感をもつとともに、これからも学級の役に立つ活動に取り組もうとする意欲が高まるであろう。

#### IV 研究の内容

##### 1 基本的な考え方

###### (1) 認め合いを生かした係活動「ぴかっと3組」への取組とは

「ぴかっと3組」とは、児童の「こんなクラスにしたい」という願いをまとめたものの総称である。ふだんの学校生活の中で、「ぴかっと3組」を合い言葉に、班活動や班遊び、勉強に取り組んだり、友達と仲良くしたりしている。

本研究では「ぴかっと3組」作りに向けた活動の場として係活動を設定した。学級のために仕事をしてみんなに喜んでもらい、お互いに頑張りを認め合うことで、学級のためになった有用感を感じることができる。担任や児童の願う学級作りに近付けることができると考えた。

###### ア 「振り返りカード」の活用とは

1学期の係活動の反省を、アンケート形式で答えたり今後の係活動の在り方を明らかにしたりするカードである。カードに記入することで、児童一人一人に考える時間が確保され、自分なりの考えをもつことができ、学級活動①でその考えをもとにして意見を出し合える。アンケートは集計してグラフ化し、同様に学級活動①で使う。児童が、新しい係活動に向けてよりよい方向性を見出し、これからの係活動に意欲的かつ主体的に取り組めるようにするために活用するカードである。

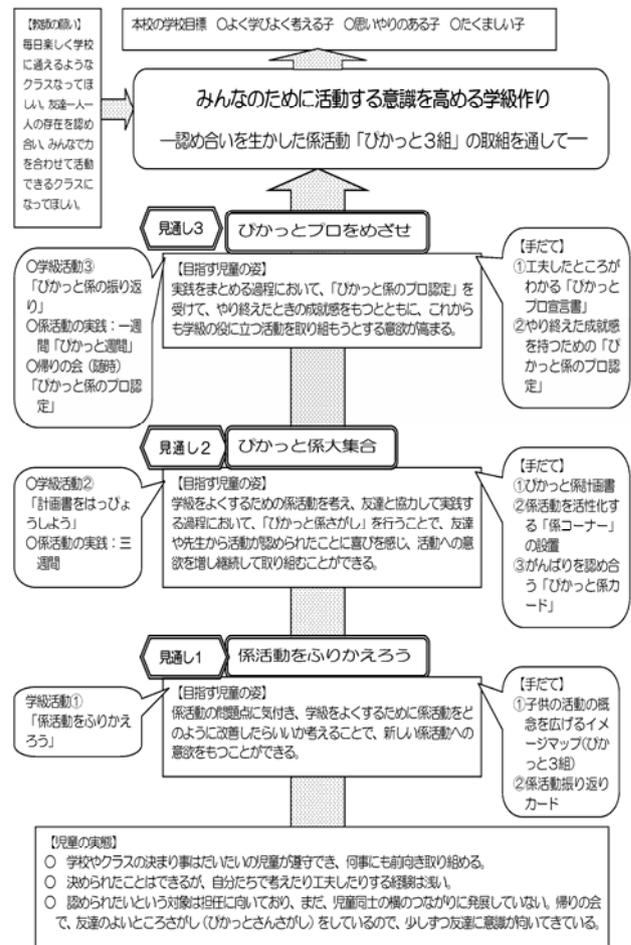
###### イ 「ぴかっと係さがし」とは

帰りの会で、その日頑張っていた係を発表する認め合いの活動である。どの係が、どんな仕事をしていたか、どんな工夫をしていたかを発表し、全員の拍手でその頑張りを称える。また、教師が見つけた「ぴかっと係」も発表し同様に賞賛する。

ウ 「ぴかっと係のプロ認定」とは

力一杯みんなのために取り組めるように、係活動の期間を一週間に限定（ぴかっと週間）して計画を立てる。その間の活動は、見通し2の活動よりも改善や工夫を加えたものとさせる。活動終了後は、拍手をもって認め合いを行い、拍手が大きければ「プロ」に認定されることとする。

##### (2) 全体構想図



##### 2 実践の概要および結果と考察

検証は、学級全体の活動の様子、意識調査、振り返りカードや活動後の感想の記述内容をもとに行う。抽出児A子は、事前の意識調査で、「みんなのためになる仕事をしたいか」という問いに対して、「少し思う」と答え、「自分はみんなのためになっているか」に対しては「なっていない」と答えた。日頃から友達が多い子ではなく、休み時間は図書室で過ごすことが多い。周囲の児童から阻害されているわけではないが、自分から交わりとはしない。1学期は「図工係」に所属したが、あまり仕事がなく不本意だったようだ。

(1) 新しい係活動への意欲をもつことができたか  
(見通し1)

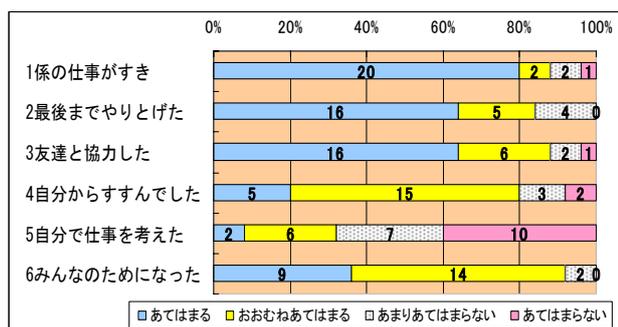
ア 実践の概要

学級活動の事前活動において、「振り返りカード」で1学期の係活動を振り返った。「意欲をもって取り組んでいたか」「協力してできたか」などの項目で、係活動の取組の様子を自己評価し、さらに、「クラスみんなに喜んでもらえるにはどんな係があったらいいか」などの項目で、これからの係活動についての自分の考えを明らかにした。学級活動①「係活動をふりかえろう」(1時間)では、この振り返りカードの記入内容をもとに、反省点の交流を行い、係活動の目当てを「クラスみんながよろこんでくれる」「クラスみんなのためになる」「楽しく活動できる」「自分たちで仕事を考える」と決めた。一人一人が作りたい係を考える期間を3日間とし、考えついたらカードに記入して、廊下に設けた「係コーナー」に順次掲示した。

イ 結果と考察

1学期の係活動の振り返りをアンケート形式で行った。(資料1) 質問項目1～3については、「あてはまる」「おおむねあてはまる」が8割以上で児童の達成感や満足感が高いことが分かる。しかし、「2.最後までやりとげた」の問いに対しては、指導者の観察では、仕事を忘れてたり人任せにしていたりした児童が少なからずいたように思われる。小学3年生の児童には、自分の行動を客観的に振り返るのは発達年齢からやや難しいこともあり、自己の認識が甘い結果となった。そこで、質問内容を工夫して追加アンケートを行った。その結果、「4.進んでした」「5.自分で仕事を考えた」という問いに対しては、「あてはまる」が2割以下であった。8割以上の児童が仕事があれば自分からは行動していないことが明らかになった。また、「6.みんなのためになった」という問いに対しては、自信をもって「ためになっ

資料1 1学期の係の振り返り



た」と答えられた児童は4割以下であった。

学級活動①では、児童は、教師が示したこの結果を見ながら感想を出し合った。提示の順は、係活動がよくできていたと高く答えた調査項目から低い項目の順とした。始めのうちは和気あいあいと感想を言い合っていたが、結果が思わしくなると、「えっ」と驚きの声が上がリ、「自分から進んでできればよかった」「新しい仕事を考えた人が少なくて残念でした」などの感想が出た。「自分は仕事をちゃんとやっていたつもりだったが、そうではなかった」と気が付いたようだ。

次に、「ぴかっと3組」になるため、2学期の係活動をどのようにしたらいいか話し合い、係活動の目当てを確認した。その後、作りたい係を発表させた。具体的には、「ミニ先生係」「友達や先生を助けてあげるいろいろ係」「クラスのおもしろい情報があるといいのでクラス新聞係」などの意見が出され、クラスみんなに喜んでもらえるにはどんな係活動をしたらいいか思いを巡らせていた。授業後の感想には、「クラス(みんなや先生)に役立つ仕事をしたい」「楽しい係を作りたい」「たくさん仕事をしたい」などの記述がみられた。

学級活動①を受けて、児童が新しい係を考えられるように3日間練り上げる期間を設けた。その間、教師は、多様な係が作られるように言葉がけや個別、グループ相談を通して、児童のいろいろな考えを引き出した。係コーナーには児童の思いがあふれる係が掲示された。(資料2)

資料2 児童が考えた係一覧

理科係	なぞなぞ係	しゅくだい調べ
生き物係	クラス新聞係	クラス遊び係
ゲーム係	お手伝い係	落とし物係
パソコン係	本読み係	ミュージック係
黒板係	おわらい係	

以上のことから、児童は、1学期の反省を受けて新しい係活動への期待を膨らませ、意欲を高めてきたことが伺える。

A子は、アンケートの結果を見たあと、「新しい仕事を考えればよかったと思います」と発言した。1学期の自分の仕事ぶりが十分でなかったことに気付いたことが分かる。

資料3は、授業後に書いた感想である。下線の言葉から、新しい係活動への意欲の高まりが感じられる。

資料4は、授業後の振り返りを書いていた際、「どんな係がやりたいか書いてもいいですか？」と質問に来てから、振り返りの用紙の欄外に書いた内容である。この授業の時間内に、やりたい仕事内容が具体的に思い浮かび、2学期の係に向けた意欲が高まったといえる。

資料3 A子が授業後に書いた感想

1学期は、あまり（こ）がなしのものも、  
たけい、2学期は、し（こ）が、  
をやりたいです。それと、2学期に、  
くできたし（こ）もやりたいです。

資料4 A子が授業後に書いた感想その2

週に1回、クラスみんな  
であそぶ日をついて、なにか  
あそぶか、アンケートをとって、夕べ  
たじゅんに、あそぶ。

資料5 係の名前と係計画書に書かれた内容

係の名前	仕事の計画
毎日ミュージック係	近藤先生に音楽のテープをお願いする。 帰りの会の時、歌を歌う。
黒板ピカピカ係	黒板にチョークで書いてある文字を消す。
クラススポーツ係	何で遊ぶかを決めて、給食が終わったら ごちそうさまをする前に、今日は何をするかを言って、どこに集まるかを言う。
スーパーなぞなぞ係	なぞなぞ大会をしてなぞなぞをいっぱい出す係です。
生き物大切係	生き物をもってくる。 (金魚・昆虫・花・めだか)
クラス新聞係	クラス新聞を作ります。
何でもお手伝い係	先生やみんなのお手伝いをする。
げい人係	げい人の物まねをして、みんなをよこばせる。
3組しゅくだい係	宿題を調べる。一週間宿題を忘れなかった人に賞状をわたす。
おとしもの交番係	3日間落とし主がいな場合、フリーマーケットのようにみんなに番号順にわたします。何が当たるかわからないよ。当たりは二つメダルがあるかもしれないよ。

(2) 活動が認められたことに喜びを感じ、活動への意欲を増し、継続して取り組むことができたか (見通し2)

ア 実践の概要

新しい係を考える3日間を過ぎてから、帰りの会を使って係編制を行い、全員が各自の希望通りの係に所属することができた。次に、係活動の詳細な内容や予定を明らかにする係計画書を作成した。(資料5)

学級活動②「計画書をはっぴょうしよう」(1時間)で、自分たちの係の仕事内容について発表し合った。児童が学級の前で提案したことで、友達がどんな活動をするか知ることができ、互いに理解し合いながら提案した係の活動を開始することができた。

約3週間、計画書をもとに協力して活動を行った。この間、帰りの会で「ぴかっと係さん」を発表し合い、学級全員が拍手で称えた。「ぴかっと係さん」の発表は、全員にぴかっと係を探す機会を与えるために順番制を取り入れた。また、探した活動を「ぴかっと係カード」にも記入し、係コーナーに掲示した。これらのことから、児童は、自分の係のことだけでなく、友達がどんな係の仕事をしているか意識するようになった。さらに、目立たない活動をしている係に対しては、地道な仕事でも認められるように、教師が承認の言葉がけを心がけるとともに、ほかの子が気付き発表できるような支援を心がけた。このような指導を通して、児童が、お互いに励まし認め合いながら、係活動を継続して取り組むことができた。

イ 結果と考察

約3週間が過ぎたところで、児童にアンケートを行った。「ぴかっと係さがし」についての感想は、全員の児童が「ぴかっと係に選ばれてうれしかった」と答えた。そのうれしさの内容を分類したところ四つに分けられた。(抜粋)

- ①認められたてれくささと喜び
  - ・ぴかっと係になったときは、ドキドキしました。
  - ・さいしょはちょっとだけはずかしくてうれしかったけど、だんだんとすぐうれしくなった。
- ②自分への満足感
  - ・こんないいことをしたんだと思ってうれしかった。
  - ・わたしは仕事をがんばったなと思いました。

③ 友達への感謝

- ・みんながいつも見ているんだと思いました。
- ・みんながいてくれるからがんばれると思いました。
- ・やっぱり、係の人がいたからこそびかっとなれたとも思いました。

④ 次への意欲

- ・ぴかっとならなるといいと思いました。
- ・もっと（ぴかっとならカード）ほしいと思いました。
- ・こんどからも（黒板を）いっぱいけしたいと思いました。

以上の記述内容から、「ぴかっとならさがし」で認め合いを行ったことは、児童が、係活動を意欲的に継続する要因の一つになったと考えられる。

さらに、「あなたたちの係はとてよくがんばりました。なぜ、がんばれたのですか」という質問に対しての児童の記述を分類したところ右のようになった。(資料6)「友達との協力」を一番の理由に挙げた児童が学級の50%もいるのは、友達と協力しながら、楽しく、時には意見の衝突を繰り返しながらも仕事をやりとげたことで、自分一人の力ではできなかったかもしれないと実感したためと思われる。また、「みんなに認められた」を理由に挙げたのは学級の35%である。「おとしもの交番係」のB男は、アンケートに「ほかのみんなからはげましがあつたからです」と書いてきたので、どんな励まされたのか聞いたところ、「フリーマーケットをやったら楽しかったよとか、がんばってと言われたこと」と答えた。B男にとって、友達からの直接の言葉がけで「みんなに認められている」ことが分かり、大いに勇気付けられたことが伺える。

これらのことから、児童が係活動を継続して取り組むことができたのは、学級の友達の存在を意識したことも要因の一つと考えられる。児童が、自分自身や自分と担任とのつながりから、友達とのつながりに目を向け認めることができるように成長したと言える。係活動を継続させた力と友達を認める力が交互に作用したと思われる。

A子は、「クラススポーツ係」になった。係が決まると次の日には、「遊びアンケート」を作ってきてすぐに配布した。アンケートを入れる箱まで用

資料6 係活動ががんばれたわけ(複数回答)

理由	人数	記述内容の例
友達との協力	14	<ul style="list-style-type: none"> <li>・係の人と協力して、サイコーの生き物コーナーができました。</li> <li>・係のみんなと協力してむずかしいなぞなどを作ることができました。</li> <li>・みんなの心が一つになったから。</li> <li>・係の友達が「黒板をきれいにしよう」と声をかけてくれた。</li> </ul>
みんなに認められた	10	<ul style="list-style-type: none"> <li>・みんなに喜んでもらえたから自分でもがんばれた。</li> <li>・みんなからはげましがあつたから。</li> <li>・みんなが応援してくれたから。</li> <li>・みんなが黒板がきれいと言ってくれたからがんばろうと思った。</li> </ul>
みんなのためになった	8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ぴかっとならを選んでくれたから。</li> <li>・なぞなどをして人のために楽しませたいから。</li> <li>・みんなのためにすごくがんばれた。</li> </ul>

意してあつた。「ケイドロ」「いすとりゲーム」「ドッジボール」「高おに」「こおりおに」を企画して順次実施した。実施する時は2～3日前の帰りの会で「遊びの内容や遊ぶ日」を知らせたり、当日は給食時間の最後に、集合場所やルール説明をしたり、同じ係のもう一人の児童と分担し合いながらの取組が見られた。活動後のアンケート「なぜ、がんばれたか」の問いには、資料7のような記述があつた。A子の様子や感想から、友達と協力しながら自分の考えやみんなに楽しんでもらいたいという思いをもって活動していたと言える。また、「ぴかっとならカードが14枚もあつた」という記述もあり、A子が「ぴかっとならカード」を励みにしていたことも分かつた。

資料7 A子が活動後に書いた感想

はいじめてのあそびのかりたつたので、いいかりにしたがつたです。クラスのみんながよろこんでくれるようにがんばりました。

(3) 「ぴかっとならのプロ認定」を受けて、やり終えたときの成就感をもつとともに、これからも学級の役に立つ活動に取り組もうとする意欲が高まつたか(見通し3)

ア 実践の概要

学級活動③では、3週間の係活動を振り返り、

各係のリーダーが、「よくできたところ」と「反省するところ」を発表した。

「その反省を生かして、係活動の仕上げをしましょう」と児童に呼びかけたところ、満面の笑みと元気な声の返事で取組を受け入れてくれた。「ぴかっと係」にプロ認定される条件は、一つ目はぴかっと週間（1週間）の中で活動すること、二つ目は今までの係活動よりさらに一工夫加えた内容にすること、三つ目は学級全員のみんなから大きな拍手をもらえることとした。児童は、プロ宣言用紙に仕事の内容を書き（資料8）、学級全体の前で発表した。さっそく次の日から活動が始まった。

### 資料8 ぴかっと係のプロ宣言

【生きもの大切係】：生きものコーナーをやって、来てくれた人にしょう品を渡します。
【毎日ミュージック係】 カラオケ大会をもう一度きちんとします。
【何でもお手伝い係】 朝、先生の所にお手伝いに行って、給食当番と日直の仕事のお手伝いもします。

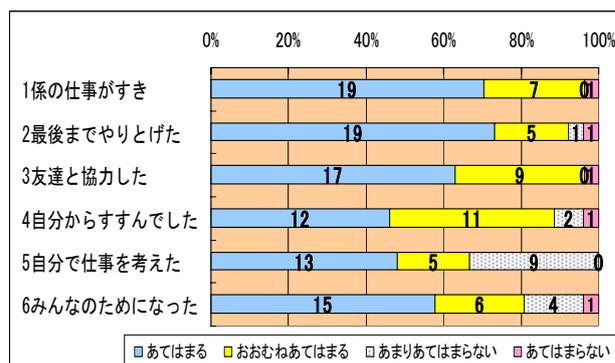
A子の見通し2後の「振り返りカード」には、「いつもクラス全員がそろってなかった」と反省が書かれてあった。確かに、クラスのほぼ全員が参加して大いに盛り上がったときもあれば、あまり集まらなくて、少ない人数だけで遊んだこともあった。そこでA子は、係の友達と「ぴかっと係のプロ」になるために、「クラス全員で行ういすとりゲーム」を計画した。「なぜ、もう一度いすとりゲームをするのか」と聞いたところ「みんながとてもよろこんでくれたから、それから、みんなができる遊びだから」と答えた。「ぴかっと係のプロ」になるために、全員で楽しめるもの考えたようである。事前の帰りの会で、何度も「全員が参加してください」と呼びかけたので、当日は、全員が参加して楽しく活動することができた。メダルを3種類用意し、1位から3位の友達を表彰して、首からかけていた。

### イ 結果と考察

児童は、「ぴかっと係のプロ認定」されることを励みに積極的に係活動に取り組んでいた。プロ認定を終えてからの「振り返りカード」には、「すごくうれしかったです。わたしは、次の係でもがんばりたいです」「また、こんどちがう係になっても、

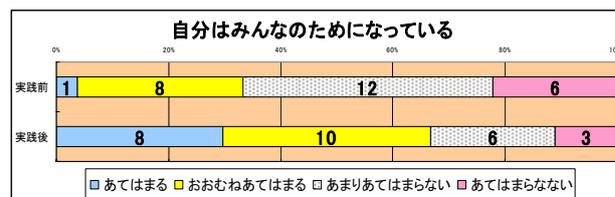
きょうりよくしあい、チームワークでぴかっと係のプロになりたいです。」などと記述されていた。このことから、みんなから認められたことが次の活動の意欲につながっていることが分かる。しかし、結果的に児童の意識がプロ認定されることばかりに向けてしまったために、途中からプロ認定が活動の手だてではなく目的になってしまったところが指導上の反省すべき点である。

### 資料9 ぴかっと係の振り返り



また、資料9を資料1「1学期の係活動の振り返り」と比較してみた。資料1では「4.自分からすすんでした」は、「あてはまる」が2割以下だったが4割に増えた。また、「5.自分で仕事を考えた」は1割から5割に増え、顕著な変化が見られた。この係活動を通して、今までは人（特に担任）に頼ろうとしていた部分をなんとか自分たちでやり遂げようとしていた児童の姿勢を感じることが出来る。「6.みんなのためになった」は「おおむねあてはまる」が減り、「あてはまる」が増えた。自信をもって答えられた児童が6割以上になったことから、自分たちの仕事ぶりに満足感をもてたことが分かる。

### 資料10 実践前後の意識調査



資料10は、上段が実践前、下段が実践後の意識調査結果である。「自分はみんなのためになっている」という問いに、「あてはまる」「おおむねあて

はまる」が2倍に増え、「あてはまらない」は半分減った。係という活躍の場が与えられ、仕事をやり終えたという経験を積んだことで、児童が自分に「自分はクラスの役にたっている」と自信を持てたことが伺える。

A子が所属した「クラススポーツ係」も「ぴかっとプロ」に認定された。「振り返りカード」に、「わたしはちゃんと係の仕事をやりとげたんだ」と思いました。とてもうれしかったです」と記述してあった。また、A子の実践前後の係活動についてのアンケートへの回答は以下の通りである。

#### 資料 11 A子の実践前後の意識調査

質問項目	前	後
1 自分の係のしごとがすき	3	1
2 係の仕事をさいごまでやりとげた	1	1
3 友達と協力して係の仕事をした	1	1
4 係の仕事を自分からすすんでした	2	1
5 自分で係の仕事を考えた	4	1
6 自分の係はみんなのためになった	2	1
7 これからは係の仕事以外で、みんなのためになる仕事をしてみたいと思う	3	2
8 自分はみんなのためになっていると思う	4	1
9 3組になってよかったと思う。	1	1

1 あてはまる 2 だいたいあてはまる  
3 あまりあてはまらない 4 あてはまらない

全体として充実感や達成感が上がっている。特に、「8. 自分はみんなのためになっていると思う」は、4から1に上がった。この結果からも、A子にとって、係活動でみんなが喜んでくれたり認められてきたことが、大きな喜びとなり、次への意欲にもつながったことが分かる。

以上のことから、「ぴかっとプロ」認定を目指して期間を限定した係活動をやりとげたことは、児童が成就感を感じ、学級のみんなに認められた喜びを味わい、これからもクラスの役に立とうとする意欲をもつのに有効であったと言える。

## V 研究のまとめと今後の課題

### 1 研究のまとめ

「こんなクラスにしたい」という願いをまとめたイメージマップを教室の前面の壁に掲示し、「ぴかっと3組」を合い言葉に学級作りに取り組んで

きた。「ぴかっと3組」になるために、クラスのみんなが喜んでくれ、みんなのためになるような係活動を考えて実践し、その頑張りがみんなに認められたことは、児童にとって大きな喜びや自信になった。実践が終わり数週間経った頃「係活動はやらないのですか」「今度は、〇〇係をやってみよう」との声が聞かれるようになり、次の活動に思いを巡らせている様子が見られた。この実践で味わった喜びや自信が、次のみんなのために活動する意欲につながっていることが分かる。

また、活動の場として「係活動」を取り入れたことは、「係活動」が児童にとって身近な活動であり、みんなのためになる活動を柔軟に考えることのできる活動でもあるため、児童の主体性や創造性を伸ばしながらみんなのために活動する意識を高めるために適していたと考える。

### 2 今後の課題

この実践が終わり、学級の様子に変化が感じられた。まず、自分で考えて行動しようとする児童が増えたことである。その行動は、時には自分に関することであったり時には学級のためになることであったりする。どちらにせよ、自分で考えて自分から行動することの心地よさを感じられるようになってきた。次に、班の中で男女仲良く遊んだり協力しようとしたりする姿が以前より見られるようになった。このような児童の姿が一過性のものでなく今後も継続されるようにするには、これからも児童が活躍できる場や時間（今回の実践の係活動のように）を、常に確保し、活動しやすい諸条件等を整備することが必要であると考えられる。

(参考文献)

- ・ 白須 富夫 編著 『どんとこい学級担任手帳』 子どもの未来社 (2003)
- ・ 向山 洋一 編 『いつでも大人気「係り活動」=小辞典』 明治図書 (1998)
- ・ 鈴木 健二 著 『係活動で学級を活性化する』 明治図書 (1991)

(担当指導主事 関口 満)